

負の遺産の観光資源化 —平和博物館にみる沖縄現代史—

研究代表者：釜山 峻平

共同研究者：今脇 早映 大畑 紗良 西藤 千葉見 東山 誓衣 吉川 爽

目次

はじめに

第1章 観光地としての沖縄イメージの変遷

第2章 追悼・平和学習の場としての沖縄

第1節 戦跡観光の場としての沖縄

第2節 平和学習・修学旅行

第3章 平和博物館と沖縄

第1節 平和博物館の定義

第2節 沖縄の平和博物館の特徴

おわりに

はじめに

本稿は、釜山・今脇・大畑・西藤・東山・吉川の6人で行なった共同研究の成果をまとめた報告書の要約である。共同研究の目的は、沖縄において負の遺産がいかにして観光資源化しているか、戦跡関連の遺産や施設が観光にどのように活用されているかという問いに答えることである。

観光の語源が「国の光を観る」であることはよく知られている。とすれば、戦争によって潰滅的に破壊された場所が観光地化するのは難しいといわなければならない。戦争の経験は、特に被害者にとっては「光」ではありえないからである。しかし現代の沖縄を見ると、「闇」が「光」になったように見える。沖縄は国内で唯一戦場になった場所であり、悲惨な戦争体験を経験した場所である。その一方で、沖縄は観光を主要産業としている場所でもある。そのような特徴を持つ沖縄において戦争関連の遺産や施設が観光においてどのように活用されているか。沖縄の観光、博物館を通じて「闇」と「光」の両方にアプローチする。

第1章 観光地としての沖縄イメージの変遷（今脇早映 東山誓衣）

本章では、負の遺産が観光資源化をみるにあたって、総括的な沖縄イメージの変遷を示す。多田治（2008）を参考にして述べていく。

青い空、透きとおった海。沖縄のイメージといえば、多くの人々がこのような癒しのリゾートイメージを強く抱くのではないだろうか。同時にここは、基地と戦争の現実を色濃く残した島でもある。

沖縄に対する本土の人々のイメージの変遷は、ここでは大きく分けて戦前、戦後の占領期、

復帰後から現在の3つに分けて主にツーリスト目線のイメージを述べていく。

戦前の沖縄には現在と変わらない南国イメージがあり、「観光」という文字通りに「光を觀に」人々は沖縄を訪れた。沖縄に行ったことのない人は「沖縄＝ハブ」というイメージを抱いていた。「非衛生」に代表される、ネガティブで差別的でさえある琉球・沖縄イメージが、ハブに具現化され、象徴的に表されていたのではないだろうか。

戦後は沖縄のアメリカによる占領期と、沖縄が返還されたのち（以下より復帰後とする）でイメージが異なる。占領期（復帰前）は、「内地でありながら、内地でない」＝「外国」というイメージが強かった。復帰前の沖縄は本土にとってまだ「外国」であったのは、沖縄に行くには身分証明書や入域許可書を総理府から発行してもらう必要があり、外務省発行のパスポートとビザを持っていく「海外旅行」に近かったからであることも理由の一つである。1941年に太平洋戦争が勃発し、この戦争で沖縄は戦場となった。戦争が起こった事実に加え、昭和27年公開の大ヒット映画「ひめゆりの塔」（今井正監督）のようなメディアの力により、本土からの沖縄のイメージは、「戦争の犠牲になった悲劇の島」であった。

そして復帰後、転機が訪れる。沖縄海洋博である。「戦争」「基地」「運動」といった現実領域とは別次元の、もうひとつの沖縄、パラレルワールドとしての「青い海」「観光リゾート」の沖縄を、幻想領域において構築することが、明らかに海洋博の主題のひとつであった。海洋博そのものが、帰ってきた国土を「青い海の亜熱帯リゾート」と再定義する形で、沖縄を再領有する意思を日本政府が示した儀式であった。その後の航空会社の大規模な沖縄キャンペーンによる「青い海、白い砂浜、ビキニの女性」という沖縄のイメージも形成し、ツーリストに、南の島の海の舞台と一体化して、自分の物語を描けるように演じたのである。

しかし、このように南国リゾートイメージだけを持っているわけではないのが沖縄である。戦跡観光も沖縄観光の重要な要素だ。辺野古基地問題などの国と沖縄県が争うほどの基地問題も、耳に新しい話である。明るい癒しのイメージと、基地沖縄の暗く危険な現実。この対照的な両者は、いかに沖縄というひとつの島に並立しているのか。私たちは、本来の「観光」の意味とは異なる「闇」の方にスポットをあてていく。

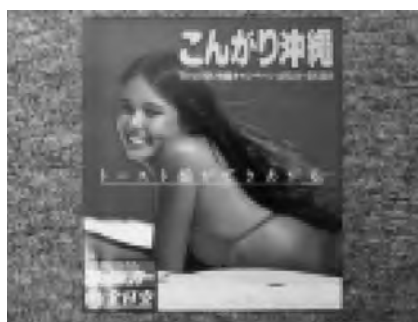


写真1 1979年全日空沖縄キャンペーンポスター

第2章 追悼・平和学習の場としての沖縄

第1節 戦跡観光の場としての沖縄（釜山峻平）

本章では沖縄における「闇」の観光に焦点を当てる。中でも負の遺産に関わる戦跡観光と修学旅行（平和学習）に着目する。

沖縄において、最初期の戦跡観光の主な主体となったのは沖縄戦で亡くなった方の遺族で

あった。沖縄における遺族による戦跡巡礼・追悼の旅を迎える機運が高まり始めたのは1950年代中頃であるとされている。沖縄巡拝遺族を迎える会が受け皿となり、渡航条件が厳しい中での遺族会による戦跡巡拝、慰霊を支えたとされている。

1954年に沖縄を訪れた北海タイムス主催「第一回沖縄巡拝と慰霊の“北霊碑”建立団」（以下、北霊碑巡拝団）が慰霊碑を建立した。これを皮切りに沖縄に各都道府県の鎮魂・慰霊碑が建立されていき、遺族会による戦跡観光が頻繁に行われるようになっていった。

1960年代から1970年代にかけて遺族による戦跡巡礼と「舶来品」ショッピングなどの慰霊観光が比較的多く行われるようになっていった。1975年の沖縄国際海洋博を起点に一般の観光客が増えていくこととなり、沖縄における巡拝遺族では一般観光客をメインターゲットとしたホテルの増加が沖縄の変化の一端を表していると考えられる。

現代では以前のような慰霊追悼を主とした遺族会の巡拝は減っているが、それと正反対に遺族ではない者たちによるダークツーリズムが増えてきていることを挙げることができる。戦跡観光は行う主体が変化したが継続はされているのである。

第2節 平和学習・修学旅行（大畑紗良）

本節では、沖縄への修学旅行の歴史、修学旅行の行先の推移、実際の見学・学習場所などをまとめ、平和学習の実態を明らかにする。平和学習とは池野によれば、戦争やそれに関わる問題を取り上げその問題解決に関連する行動を促す教育。また、平和意識に関わる問題を取り上げその問題解決に関連する行動を促す教育の一つである（池野，2008）。

沖縄への修学旅行は、1969年に最初の事例があり、その後1978年公立高校の修学旅行航空機利用が可能になったことをきっかけに増加していった。図1を参照すると、1995年に入って初めて沖縄が10位でベスト10に入っている。1997年には4位にまで上がり、1999年では3位で全国高等学校修学旅行全体の16.3%にあたる。2013年には沖縄は1位で全体の14.5%である。割合が減っているのは修学旅行の多様化してきたからだと推測できる。

次に実際の見学場所を見ていく。全国高等学校修学旅行の実態（平成11年度実施、15年度実施）から見学場所ベスト20を参考にする。1997年、1999年、2001年、2003年の統計から戦争の平和学習を目的とした見学場所として挙げられるものには、ひめゆりの塔、平和祈念資料館、糸数壕、摩文仁の丘、平和祈念公園、長崎原爆資料館、長崎平和祈念公園、広島平和記念公園、がある。その中で沖縄にある見学先は長崎平和祈念公園と広島祈念公園の2つを除いた5か所である。このことから沖縄が修学旅行先として上位に選ばれる理由は戦争に関係する見学場所が数多くあり平和学習に適しているという側面も考えられる。

修学旅行先都道府県ベスト12（数値は全国修学旅行実施校に対する割合％）													
順位 年度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平成 3年度	京都	奈良	長野	東京	長崎	千葉	福岡	広島	兵庫	熊本	北海道	大阪	
	32.4	23.0	19.7	18.8	15.5	15.3	13.0	12.6	12.4	12.1	10.1	9.1	
5年度	京都	奈良	長野	東京	千葉	兵庫	長崎	大阪	北海道	広島	福岡	熊本	
	31.4	20.4	17.7	15.3	13.6	13.3	12.5	12.3	11.7	11.0	9.7	8.6	
7年度	京都	奈良	長野	東京	北海道・大阪		長崎	千葉	福岡	広島・沖縄		熊本	
	29.5	20.3	15.9	14.2	13.3		12.9	12.8	10.6	9.5		8.8	
9年度	京都	北海道	奈良	沖縄	長崎	長野	東京	千葉	(海外)		大阪	福岡	広島・熊本
	23.5	16.0	15.5	14.0	13.7	13.4	13.3	12.6	11.3	11.1	10.9	8.8	
11年度	北海道	京都	沖縄	(海外)		奈良	長崎	東京	長野	大阪	福岡	熊本	広島
	19.9	18.7	16.3	13.5	12.5	12.2	11.1	10.9	8.1	7.2	5.8	5.1	

図1 出典：全国高等学校修学旅行の実態（2001）p.43

第3章 平和博物館と沖縄

第1節 平和博物館の定義（西藤千菜見）

「戦争博物館」・「平和博物館」という言葉は、現在明確な定義がなく様々な意味で使用されている。そのため、この節では、どのような意味でこれらの言葉が使用されているかということ整理していくこととする。まずはそれぞれの言葉について把握した上で、平和博物館、戦争博物館の定義を整理する。

- (1)「博物館」：資料を広く集めて研究・保管し、一般の利用のために公開する施設で日本に5547館存在する施設
- (2)「戦争」：①軍隊と軍隊とが武力を行使して争うこと、特に国家間の全面的な争い
②過酷な競争や激しい混乱
- (3)「平和」：戦争や紛争がなくおだやかであること
- (4)「平和博物館」：平和博物館に対する考え方には様々なものがある

ここからは「戦争と対をなす意味での平和を扱う施設」を指して平和博物館と呼ぶこととする。

第2節 沖縄の平和博物館の特徴（吉川爽）

本節では、沖縄における平和博物館が観光対象になった理由を検討するために、戦争・平和博物館の一般的な分類を提示する。

市川虎彦（2003）は、日本全国にある戦争・平和博物館を、「普遍性／限定性」と「国民的／地域的」という二つの軸によって分類している。これは、集客の観点から設定された軸である。「普遍性」とは、「不特定多数の人々の観覧を前提にしており、知的な刺激を提供することに比重がある施設または観光施設の要素をあわせもち実際にそのような集客力のある施設」である。「限定性」は逆に、「不特定多数の来館を必ずしも期待してはおらず、社会教育（とりわけ平和教育）のために運営されているという性格が強い目的や来館者層が限られる施設」である。

もう一つの「国民的」、「地域的」の軸は、戦争・平和博物館に特有の分類である。「国民的」とは「国民全体が共有する歴史にそった展示が行われ、多かれ少なかれ国民的なアイデンティ

ティ形成に資する役割を果たす戦争博物館」を指し、「地域的」は「地域固有の戦争体験にかかわる資料を収集・保存し、それを展示することによってその経験を伝えていく役割を担う戦争博物館」を指している。つまり、「国民的」と「地域的」では、展示を行なう側の目的が異なっている。

市川は、これら二つの軸の端に存在する四つの特性の、二つずつを組み合わせて既存の博物館を分類することができるとしている（図2）。

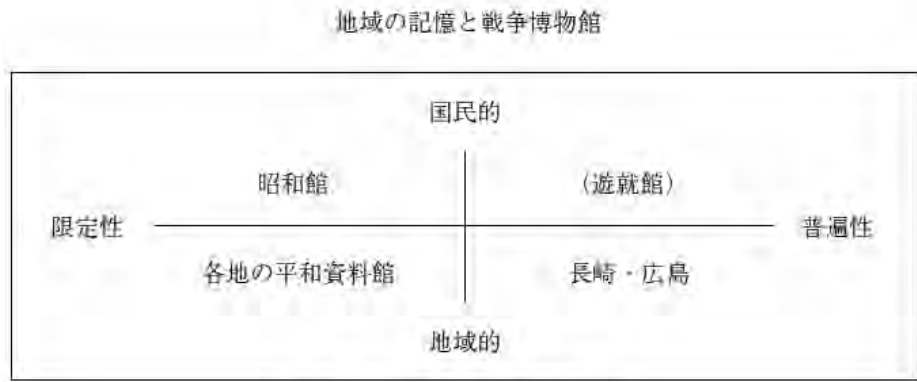


図2 戦争博物館の位置づけ

「普遍性／限定性」と「国民的／地域的」の軸による分類と、「哀悼／顕彰」と「人間の破壊／軍事技術の賛美」の軸による分類を手がかりにすると、沖縄の平和博物館の特徴が浮かび上がってくる。

沖縄には、公立の平和博物館として、沖縄県立博物館、平和祈念資料館、南風原市民文化センターがあり、民間の平和博物館として、ヌチドウタカラの家、ひめゆり平和祈念資料館、対馬丸記念館がある。公立と民間の違いにも関わらず、これらの博物館の展示内容は、地域の戦争被害を中心に展示したものであり、設立の目的は社会教育においたものである。市川の分類でいうと、「国民的」ではなく「地域的」であり、「普遍的」ではなく「限定的」な博物館に位置づけられる。

しかし、博物館をみる視点を設立者ではなく来館者に移してみると、「普遍性」と「限定性」の特徴は逆転する。これらの博物館が、地域の戦争の歴史を展示したものであるが、地域の人々の戦争体験は、地域の枠組みを超えて広く、多くの人々に関心を惹くものになっている。つまり、戦争体験の継承という展示テーマは、「普遍的」と解釈することも可能なのである。展示内容が「限定的」か「普遍的」かという問題は、それを受けとめる来館者に見方によるのである。

おわりに（西藤千菜見）

本稿では沖縄において負の遺産がいかにして観光資源化しているかを見てきた。第一章では観光地としての沖縄のイメージの変遷を明らかにした。戦前の南国イメージと非衛生的な地という印象が、戦後アメリカによる占領期には「内地でありながら内地でない」外国のようなイメージと戦争の犠牲になった悲劇の島のイメージへと変化した。その後、沖縄が本土復帰してから現在までは青い海の亜熱帯リゾートのイメージが生じたが、一方で戦争の犠牲になった悲劇の島のイメージも継続されている。

第二章からは沖縄の観光の負の遺産観光に焦点を当てた。その中でも特に遺族による戦跡巡礼・追悼の旅から端を発した戦跡観光と、平和学習を目的とした修学旅行の2点についての歴史的な経緯をみてきた。

第三章では、沖縄における追悼の旅・平和学習の修学旅行で欠かすことの出来ないウエイトを占める平和博物館に焦点をあてた。市川虎彦（2003）による平和博物館の一般的な名分類を参照しつつ、私たちが実地調査した沖縄の平和博物館の特徴を検討した。市川は、設立目的・系の観点から日本の平和博物館を「普遍性／限定性」の軸で分類し、これに従うと、沖縄の平和博物館は「限定性」を特徴とする博物館に位置づけられることになる。しかし、来館者からみると、それは全く逆になる場合があると私たちは考えた。つまり、設立目的が「限定的」であったとしても、それを見る者にとっては、平和博物館は誰にとっても重要な問題である平和を目指した「普遍的」なテーマが展示されているということである。

これは、「負の遺産の観光資源化」が起こっている局面とみることができる。戦争被害と関わる負の遺産であっても、見る者がそこに普遍的なテーマを見出すならば、負の遺産は観光資源となるのである。観光地としての沖縄の歴史をみると、海洋博を契機とした「光の観光開発」と、負の遺産を起点とする「闇からの平和希求」を両輪として観光展開してきた歴史があることに私たちは気付いた。現在の沖縄は、「青い空・青い海」のリゾート地としてのイメージが強いが、その一方で、負の遺産を大事にしてきたことも事実である。光と闇の二つの観光史的展開こそが、私たちの共同研究を通して気付いた最大の成果であり、それが沖縄現代史の大きな特徴の一つである。

参考文献

池野範男

2008「学校における平和教育の課題と展望—原爆教材を事例として—」広島大学院教育学研究科

市川虎彦

2003「地域の記憶と戦争博物館」『松山大学論集』17（4）：43-65。

北村 毅

2005『人間科学研究 第18巻第2号』pp.137-152

「戦死者へ／との旅—沖縄戦跡巡礼における〈遺族のコミュニタス〉」

櫻澤 誠

2010『立命館平和研究第11号』

「『沖縄戦』の戦後史—「軍隊の論理」と「住民の論理」のはざま—」

多田 治

2008『沖縄イメージを旅する：柳田國男から移住ブームまで』中公新書ラクレ

日本修学旅行協会

2001『全国高等学校修学旅行の実態』日本修学旅行協会

日本修学旅行協会

2003『全国高等学校修学旅行の実態』日本修学旅行協会

宮城博文

2010『社会システム研究 第21号』

「沖縄県ホテル業の発展と現状—訪問客の視点を通して」